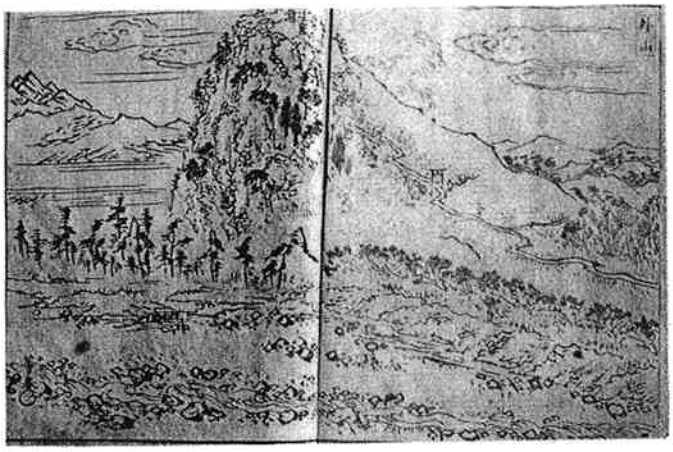
・拝殿建築　昭和八年七月
・本殿屋根葺替　昭和一八年
・拝殿改修　昭和三九年

(3) 寺　院

台宗日光山多聞寺

所在地　北海道常呂郡佐呂間町字栃木

寺の由緒と沿革



栃木県日光山多聞寺の所在地図

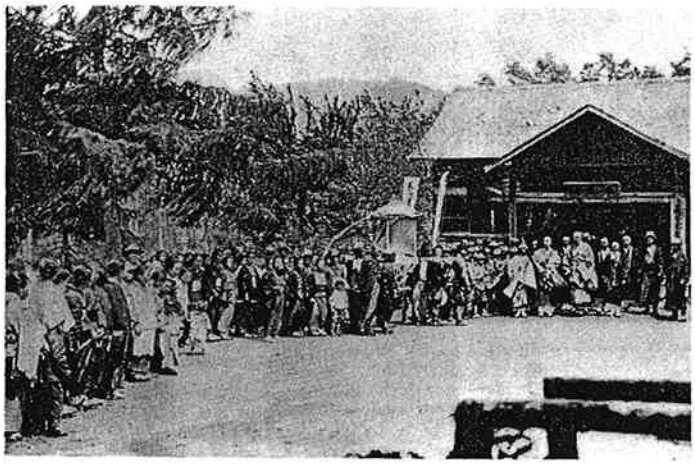
日光山多聞寺は、大正二年、本町字栃木に遷座するまでは、栃木県日光山内御営前に、日光輪王寺の末寺としてあった。

開基は、弘法大師が日光嶺に御巡錫のおり、大谷川、稲荷川合流外山の麓に、毘沙門天像を自刻して堂に祀り、開教したのが始まりと言われている。そのころより日光山多聞寺を号していた。

徳川家康公は、当寺を殊のほか尊信帰依し、永代寺領二百石を与えたといわれる。従って当寺は、徳川家康公の御朱印付の寺院として別格の処遇を受けていたことになる。

しかし、当寺は、これまでに二度の災難にあっている。一つは、天知年中の稲荷川増水による流失、二つには、火災による明治一九年の堂宇

の焼失である。そして、本町字栃木に、遷座勧請の運動が起こるまでは、廃寺同然になっていた。それを再建し、遷座の先駆的役割りを果たしたのは、栃木県下都賀水代村報恩寺住職林円諦師その人であった。師は、明治四五年六月、栃木県団体移住の当地に慰問布教に訪れている。師は、日夜、開拓に労苦をかさねている移住者達を見聞し、その人達のために寺院を建立しようと、ひそかに決意してその十月に離道している。七七才の老体に鞭打って遷座と再建、移住者の信仰のために日光本山に赴き説いてまわったが志半ばにして他界している。しかし、その熱意に対して、天台宗本山比叡山延暦寺座主より、最高功労賞である梶井三諦賞、袈裟が下賜されている。やがて、日光一山会議の結果、日光山多聞寺の再建と移転が決定された。時に、大正二年四月であった。本町字栃木に本堂が落慶したのは、それから三年後の大正五年五月二二日である。住職は、千葉県山武郡成東町宝聚寺の疋田亮秀師が本山の特派として、大正九年六月まで在寺している。その後、檀徒総代瀬下六右衛門、田中鷹之助、阿部利三郎、篠原末吉の四氏が檀徒一同を代表して、延暦寺本山に住職派遣について接衝したが得られず、止むなく、移住者の一人、古沢英道氏を日光本山で学ばせ、大正一二年に本町字栃木の多聞寺の住職につかせている。



昆沙門天神霊奉迎し当時の多聞寺全景

檀信徒の信仰とその概要

創建時は、栃木部落は勿論、本町、湧別、留辺蘂の全域に亘っており、数は、三〇〇戸余りだったといわれる。

なお、布教、宣教活動の一つとして、武士（現在の若佐）の市街に観

音堂を建立、如意輪観世音を安置して、月例十日を縁日と定めていた。

創建時の寺院組織配置

○ 檀徒総代人　阿部利三郎他三名

○ 寺世話人　田中梅三他九名

○ 馬頭観世音世話人檀信徒代表　川島平助、守口勘治他一五名

○ 武士市街観音堂世話総代人　稲葉トシ他三名

○ 会計　木村長三郎

多聞寺の宝物（栃木県日光山より伝わる宝物）

○ 昆沙門天像（立像　丈八寸　木像）

由緒（多聞寺控帳より）

弘法大師東国地方御巡錫の砌り日光山に上り、東北隅に一孤峯有り外山と名付く。弘仁一一年七月二六日昆沙門天神霊に感応有り、て、弘仁一一年九月七日自ら昆沙門天王の聖容を自刻し、外山の絶頂に安置し、由来一千二百有余年、多聞寺の本尊として今日に及ぶもの也。

○ 釈迦如来（座像　丈七寸　木像）

由緒（多聞寺控帳より）

日本仏教の門祖とも仰がるる伝教大師・即ち最澄上人（約千三百年前）、桓武天皇の命を受け、比叡山延暦寺を建立するに当り、大願成就の為、釈迦、弥陀、薬師如来の三尊仏を自刻し、比叡山に安置す。その先端を以って別に釈迦像を自刻し、守護神となせり。後日、日光山に伝わり多聞寺に安置せるもの

也。（座像の御額の白光はダイヤモンド入りのため）

○ 徳川家康公の御納骨入木像（丈八寸座像）由緒（多聞寺控帳より）

○ 徳川家康公薨去の直前即ち元和四年二月一八日、只今の皇居江戸城紅葉御殿において慈眼大師（天海大僧正）之を自刻し、同年四月一七日、家康公薨去と同時に霊写御納骨申し上げしもの也。

○ 明治天皇御尊儀（丈七寸）

由緒（多聞寺控帳より）

当多聞寺は古来より幾多の変遷は有ると言えども、別格一等寺としての位格を有するため、畏くも天皇崩御（明治四五年七月三〇日）と共に宮内省より御下賜・安置奉祀を命ぜられしもの也。

○ 善光寺如来三尊仏（丈一尺）

由緒（多聞寺控帳より）

作者不詳なるもその昔、信濃国善光寺より御分身を受け、当寺に古来より安置せるもの也。

○ 馬頭観世音（全像　丈一尺二寸　立像）

由緒（多聞寺控帳より）

公弁法親王の御作にして、足利尊氏将軍、陣中に奉祀し戦勝並びに人馬の安全を祈願し、霊効を顕わしたりと言えり。のち当多聞寺に安置せるもの也。

○ 鶏一対（左甚五郎作　日光の眠り猫の作者）

由緒（多聞寺控帳より）

徳川三代将軍家光の時代、日光山東照宮御造宮の折り、甚五郎が特に自刻し、多聞寺に奉納し、早き

頃同寺玄関鴨居の上に有りたるものを地方並びに寺院に不思議なる事変が起こりしごとに啼きたる事にて今や本堂内正面欄間の中に在る。

○ 菊花御紋章付袈裟並びに紫衣

由緒（多聞寺控帳より）

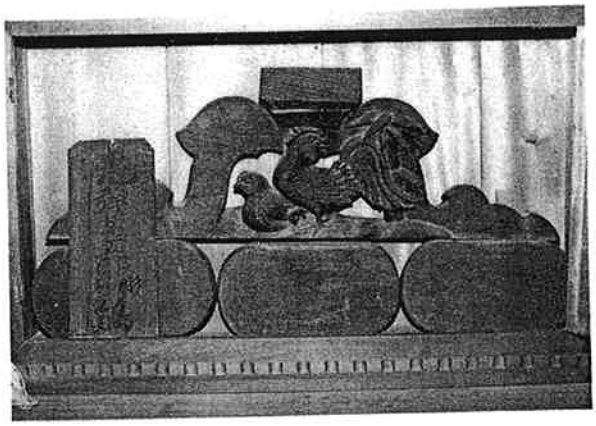
天海大僧正の生前御召しされたもので、皇室が大僧正の徳を讃えて特に御下賜寄進せられたるもの也。

○ 子育観世音（木像）

○ 成田不動尊石刷一幅（狩野安信実筆）

○ 日光山誌五巻　石版刷（石橋真国、桜井東勝、天保七年九月八日作）

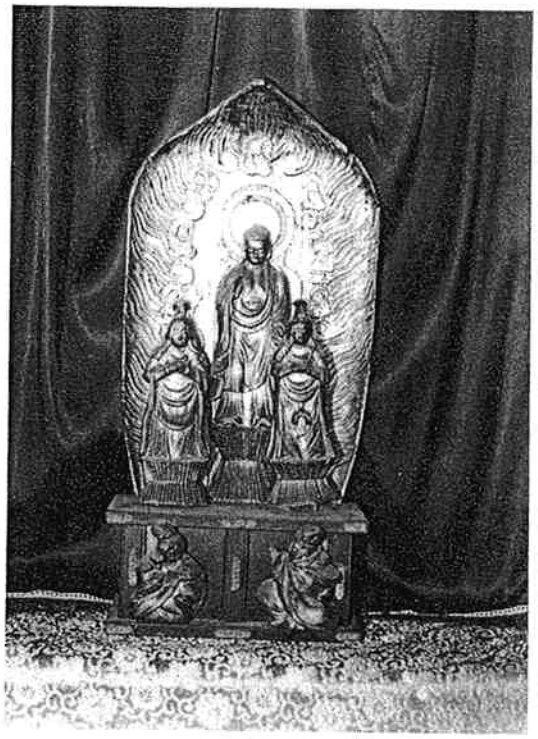
―いずれも多聞寺控帳より―



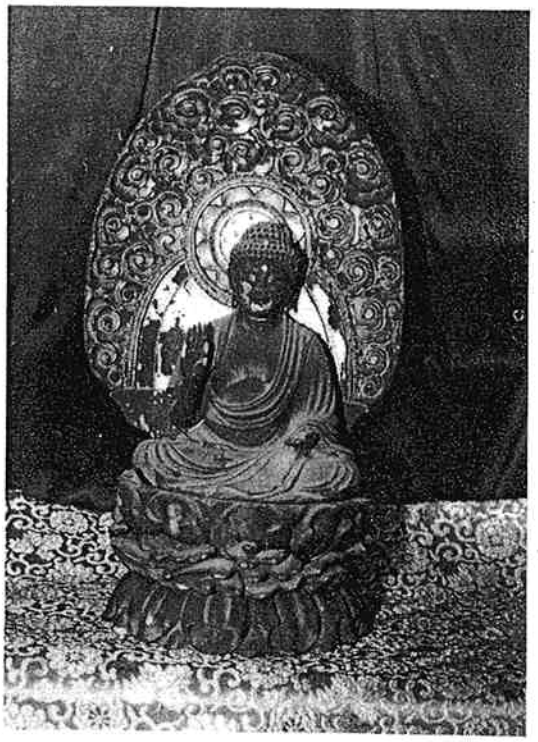
鶏一対　左甚五郎作

徳川家康

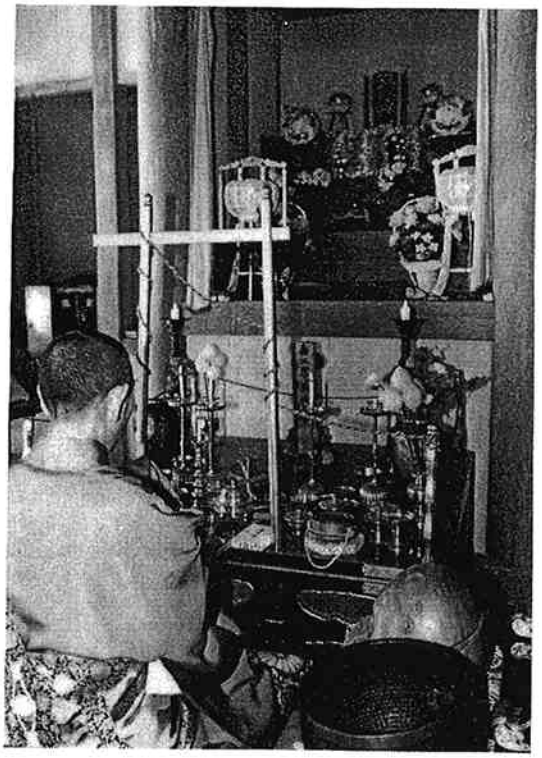
天海大僧正御召の法衣



如来三尊仏



釈迦如来座像



現在の多聞寺本堂と毘沙門天像

十九夜尊像の掛け軸

○ 田中正造翁肖像画（多聞寺控帳より）

明治憲政史上、政治の神と仰がれ、国会開設以来衆議院議員田中正造翁の写真にして、前述の如き水文、二丈六尺余（約七米八〇糎）の大洪水の真最中、内務大臣平田子爵水害実況を親しく視察為したる砌り、同翁が見取図を構成し、詳細に実情を示し徹底的救済方を陳情請願を為しつつある処である。同翁没後直ちに栃木県藤岡町に田中神社に祀れ、明治の佐倉宗五郎と謳われつつあるもの也。

資料（多聞寺控帳より）

○ 寺称

天台宗日光山多聞寺

○ 寺格書

北海道北見国常呂郡佐呂間村字栃木

多聞寺

壹等ニ班列ス

大正二年一二月一五日

天台宗座主　大僧正　不二門智光

○ 移転当時の多聞寺は境内の土地一反歩（一〇a）本堂は八坪七合五勺、庫裡一二坪五合

檀徒一〇九戸

檀徒総代　瀬下六右衛門他七名

初代住職　律師　林円諦氏　御堂完成を見ず遷化す。

御本尊善光寺三尊仏

二代住職　中里昌競氏　大正八年頃赴任し、寺院完成する。

三代住職　疋田亮秀氏

大正九年六月一一日　住職

大正九年一一月四日遷化す。

四代住職　中律師　古沢英道氏

大正一〇年　住職

大正一二年　馬頭観世音入仏

昭和九年一九　夜観音入仏

昭和一〇年六月一〇日

多聞寺昆沙門天御本尊入仏

昭和二九年三月二二日遷化

五代住職　中律師　古沢英順氏

昭和二九年九月　住職

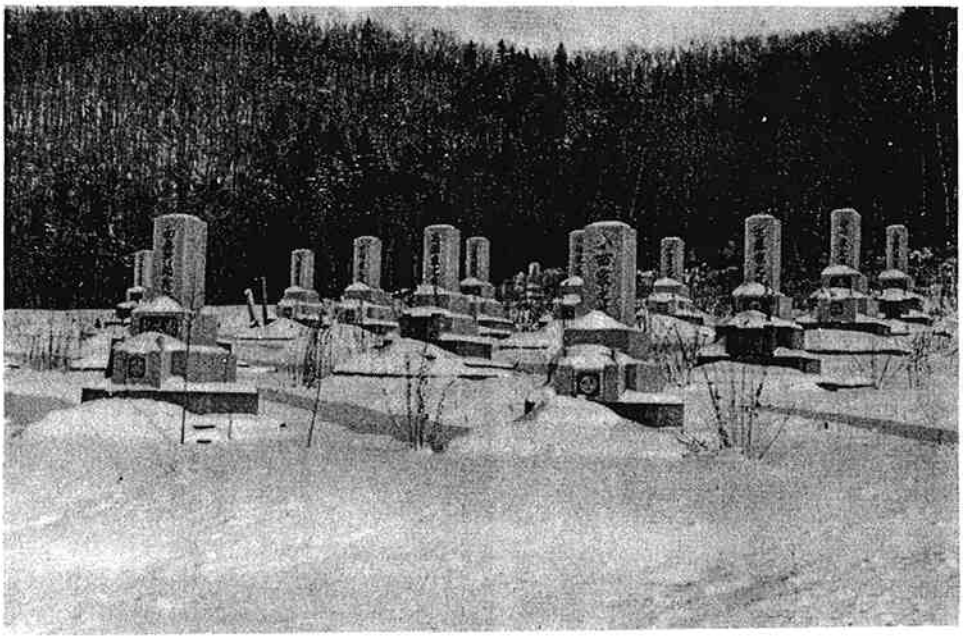
○

墓地

昭和五年八月調製

墓地台帳　佐呂間村字栃木

管理人　日光山多聞寺住職　古沢英道



現在の墓地

墓地は一七九区画あるが昭和五年に当時の青年団員の勤労奉仕をして立木伐採し整地したものである。

○別院

昭和六年五月八日　武士（若佐）入仏執行

日光山多聞寺住職　英道開眼奉修

昭和三〇年栃木県多聞寺へ帰る。

昭和五一年七月一三日　佐呂間町字西富、佐呂間火葬場入口に佐呂間供養所、多聞寺別院建立する。

住職　古沢英順氏

○その他

馬頭観世音菩薩

所在地　四二五番地

大正一一年七月一五日建立

創立者　古沢英道氏

祭日　七月一五日

昭和三三年四月二七日改築

寄付金　九七戸　三万二千五百五十円也。

幟奉納

大正一二年七月一五日　願主講一同

昭和初期　阿部武二

大正十一年建立の馬頭観音堂

昭和三〇年七月一五日　遠藤勇作
馬彫刻掲額奉納
昭和九年四月三〇日
奉納者　豊田秀雄、井上与造、十亀実助
原木寄贈者　鈴木徳次郎
下絵　山下源松
彫刻　岩泉定雄
世話人　松本亀之助、越智荒太、関口兼吉

(4)　歌舞伎（大正二年）

栃木農村歌舞伎の創始者は、川島平助氏だった。

川島平助氏は、明治七年、栃木県下都賀郡谷中村に生れる。一七才で谷中村の演芸団に参加、二〇才で東京名代市川猿之助の弟子、市川猿作に入門、修業を積み、東京歌舞伎役者の免許状を取得していう。そして、その後三年間、大夫元として地方巡業に出ている。そんな彼にも、身近の変化が起きた。明治四四年四月、彼は、北海道移民団に加わり栃木第一次入植者として、開拓の鍬を振うことになったのである。しかし、開拓者としての彼にも、往時の歌舞伎は、忘れられずにあった。大正二年、栃木幹線道路四一号の完成祝いの祝賀会で部落の青年達に歌舞伎を指導して興業した。これが、栃木農村歌舞伎の始まりになり、各地方での興業につながっていくのである。

現在の馬頭観音堂